

令和3年度 特別の教育課程の実施状況等について

1 管理機関による特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

宮城県		
学校名	管理機関名	設置者の別
聖ウルスラ学院英智小・中学校	学校法人 聖ウルスラ学院	私立

1. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- 一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

特になし

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- 実施していない

2. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

聖ウルスラ学院英智小・中学校は、学校教育目標の実現に向け、特別の教育課程を実施する中で、自己評価および学校関係者評価による結果を踏まえた教育活動や評価方法の検討などの研究を重ねている。児童生徒の学力の定着状況等から、この教育課程実施による効果について確認できている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

聖ウルスラ学院英智小・中学校は、学校教育目標の実現に向け、小中学校9年間の一貫教育を見据えた指導計画作成および授業等教育活動を研究的に実施しており、それらは法律に規定する教育目標に照らして適切である。また、学習指導要領に定める内容事項についても把握、全体管理を行っていることを確認できている。

3. 課題の改善のための取組の方向性

教育の成果については保護者、地域の方々から一定の評価を得てはいるが、より理解を深めていただくためにも、HP等を活用した特別の教育課程における取組状況や成果について、さらなる積極的な発信が求められる。また、児童生徒の実態、自己評価および学校関係者評価結果を踏まえつつ、時代を見据えた教育課程全体の再確認、見直し等を検討する時期に来ていると思われる。

2 学校における自己評価

1. 実施の効果及び課題

本校はカトリック学校の使命として、子ども一人ひとりがキリスト教的人間観に基づいた豊かな内面を形成していく成長、すなわち生きる力の育成を目指し、「確かな学力の保障と人間成長の保障 両全の教育」という教育ヴィジョンを打ち出し、以下のような独自の教科等の実践を行っている。

【独自の教科等】

言語技術科 F1 年生～T9 年生（1時間）

英語科：F1～S6 年生（F1～4 年 2 時間、S5・6 年 3 時間）

プログラミング科：F3・4 年生（1時間）

書道科：S7～T9 年生（1時間）

仲間・共生：F3～7 年生：（F3・4 年 0.4 時間、S5～7 年 1 時間）

地球市民：T8・9 年生（1時間） PC英語：S7～T9 年生（1時間）

宗教：F1～T9 年生（1時間） 道徳に替えて

【上位学年の学習内容の先取り】

社会と理科の先取り F2 年生から

数学の先取り S6 年生の後半から

* 上記の独自の教科等実践のために、小学校3年生からの総合的な学習の時間及び2年生の生活科の削除と6年生の家庭科の一部を削減している。これらの削減については、教科横断的な探求型学習の実践の積み上げ、それらのまとめの時間ともなる「仲間・共生」「地球市民」ほか、体験学習等の充実を図ることで、さらなる教育の充実を図っている。

F1 年生～F4 年生（小学校 1～4 学年） S5・6 年（小学校 5・6 学年）
S7 年～T9 年生（中学校 1～3 学年）

本校では、児童及び生徒の発達段階に適した独自の教科等を含む各教科等の内容を、義務教育 9 年間全体を通して、系統性・体系性に配慮しながら教育課程を編成している。また、週 6 日制の採用、7 年生以上は第 7 校時までの時程を設定して授業時数を十分に確保しつつ、スパイラルに学習が進められるように、各教科において 9 年間を見通したシラバスを作成し、学びの定着を高める工夫も行っている。特に、すべての学習の土台となる「ことばの教育」に関しては、独自の教科「言語技術科」を設定し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の領域を総合的に育成するよう努めている。

また、全体的な「学力の保障」については、日頃の授業内容や補充学習の充実、家庭学習の推進等により、対外的にも全国的な学力調査、模擬試験等の成績にその成果が表れている。さらに、「人間成長」については、宗教教育を土台とした祈りのある毎日の生活の中で、そして、「仲間・共生」「地球市民」等の活動の中で、ESD 活動を柱とし、自己と向き合い他者と関わり合いながら、自身のあり方、生き方を学んでいけるよう、人間的な成長を促す教育のさらなる充実を目指しているところである。

しかしながら、この 17 年の間に時代は加速度的に進化し続け、児童生徒を取り巻く環境の変化に伴う特例校としての新たな課題も生まれてきている。2 度の学習指導要領の改訂を経たことにより、さらに発展的な教育課程の編成が必要な時期に来ているものと考え。また、学校の特色教育が保護者、地域の方々に認められ、その教育の成果が大きく期待されていることはアンケート結果から明らかであるが、同時に、教育課程のさらなる工夫や改善が必要であるとの意見があることも事実である。

2. 課題の改善のための取組の方向性

教育課程特例校としての本校の歩みは、不易なるカトリック精神に基づく教育を礎に、時代のニーズを検証しつつ、今を生きる児童生徒に必要な資質能力を育むための教育を先駆けて行い、一定の成果を上げてきた。しかしながら、前述の通り、急速に変化し続ける社会状況に対応し、児童生徒の資質能力向上のための教育内容改善を考察しなければならない時期であることもまた事実である。例えば、ゆとり教育の時代だからこそ効率的に実践できた先取学習は、学習指導要領の改訂に伴い、見直しの必要性が生じてきている。また、コロナ禍により学びの形態も多様化し、オンライン授業の取組や体験学習の在り方等、これまで以上の創意工夫も求められている。

学校教育の成果を広く発信しつつ寄せられる貴重な意見等も踏まえ、これらの課題について慎重に検討を重ねながら、よりの確で効果的な教育課程の創造を進めていかなければならないと考える。また、高等学校の新学習指導要領の実施年を迎え、高校 1 学年からの真の学びに直結する、義務教育 9 年間全体の教科指導のスパイラル学習の進化と深化を見極め、併設校としての本学校法人の高等学校とともに、研究開発を進めたいと考えている。